

〔書 評〕

## 大村晴雄著 『日本プロテスタント小史』

山 口 陽 一

私が、大村晴雄先生の「日本基督教史」の講義に列したのは、一九八三年の秋、東京基督神学校第二年度の集中講義であった。近世哲学史を専門とされる先生は、この講義を「良い意味で片手間に」というような言い方をされたが、「公会主義」をめぐる丹念に資料を読んで行く講義は、精緻にして巨視的、ずしりと重い課題を示されたという印象であった。年度によって、組合教会の朝鮮伝道に比重がおかれたり、聖公会からの視点が加わったりしたことを聞いていたが、今回はそれらがまとめられたことを多くの卒業生と共に感謝している。

共立女子神学校・聖書神学舎（聖書宣教会）・日本基督神学校（東京基督神学校）での講義、三十年の蓄積が二三〇頁に集約されているわけであるから内容は重厚である。「小史」とされたところに、「良い意味で片手間に」と微笑んでおられる先生を思い浮かべるのであるが、通史ではなく触れられていない事項も多いとはいえ、日本プロテスタントの特質についての一徹な主張を持つ本書は、個性ある「日本プロテスタント史」として位置付けられるべきであろう。

## 時代区分をめぐって（序説）

時代区分は、歴史をどのように見るかを如実に反映する。この時代区分において本書は異彩を放っている。序説におけるその区分とは次の通りである。

- (1) 一八五九年～一八七二年（十三年間） 宣教師の活動しかなかった時期
- (2) 一八七二年～一八九〇年（十八年間） 戦前日本プロテスタント教会の基本姿勢が整った時期
- (3) 一八九〇年～一九四五年（五十五年間） 発展の時期

著者は、(2)の時期を日本プロテスタント教会が志向する歴史理念が明らかになる最も重要な時期とする。比較のため、日本プロテスタント史の代表的な時代区分である大内三郎氏のそれを見ると、以下の通りである。

- (1) 一八五九年～一八八一年（二十二年間） キリスト教の移入期
- (2) 一八八一年～一九一二年（三十一年間） 教会の生成期（明治期）
- (3) 一九〇八年～一九三二年（二十四年間） 教会の発展期（大正期）
- (4) 一九三一年～一九四五年（十四年間） 教会の困厄期

〔日本プロテスタント史』『日本キリスト教史』一九七〇年、日本基督教団出版局〕

この比較から、著者が日本プロテスタント教会の特質の形成を非常に早い時期、即ち一八九〇年代の天皇制国家体制の確立期（小崎弘道によれば「信仰試煉期」）以前に見ていることがわかる。つまり、日本プロテスタントの志向する歴史理念は、大日本帝国憲法から「教育と宗教の衝突」論争に至る国家主義の確立、および新神学の影響以前の日本基督公会においてすでに明らかと見るわけである。

また、一八九〇年―一九四五年を一括して「発展の時期」と捉えるのも定説破りと言えよう。大内氏が「生成・発展・困厄」を見る時期を、本書は一括して「発展」とするのである。曰く「この半世紀間をさらに区分しなければならぬ実質的な時代特質は見いだし難いように思われる。日本プロテスタント教会はこの五十五年をただひたすらに、連続的上昇発展の道を歩んだのである」。そして、これが日本国家の連続的上昇発展と軌を一にしているのは「深い暗示を与える」としている（五―六頁）。

ここで「発展」の意味するところを考えなければならない。大内氏の「発展」は「生成」「困厄」とは区別されるところの「発展」であり、誰の目にも妥当と見える。だが、この区分に対し澤正彦氏が、あるいは韓国のキリスト者が投げ掛けた疑念は深刻である。澤氏は韓国における日本キリスト教史の講義を通し、一九一〇年の日韓併合以降韓国教会が味わった苦悩の歴史を思うとき、それと重なるこの時期を日本の教会の「発展」とすることは納得できないとした（『ソウルからの手紙』一九八四年、草風館、一八頁）。この点は、アジアの中での日本プロテスタント史再考が目指される現在、時代区分においても乗り越えてゆかなければならないところである。

ところが、一八九〇年から一九四五年までを、日本の国家と軌を一にした教会の連続的上昇「発展」と観るとき、初めから問題含みな「発展」として、これを理解することができないのではないだろうか。しかも、本書がこの「発展」期を主に扱うのは、日本の朝鮮侵略のお先棒を担いだ組合教会の朝鮮伝道を論じる、第四章「海外伝道」なのである。

## 日本基督公会から日本基督教団まで（第一章～第四章）

### 第一章「開国と宣教師の渡来」

日本最初のプロテスタント教会は、横浜の日本基督公会であるとかかなり容易に信じられている。確かに、日本人を信徒とする教会は横浜が最初なのであるが、著者は「教会成員の国籍が創立の先後を条件づけるわけではない」として、一八六〇年長崎に創立されたと推定される聖公会の教会が最初であるとする。これも「公会主義」史観は正の一端であろう。また、プロテスタントは洋学として受容され、初代宣教師はこの方面で多大な業績を残したが、「忘れてならないのは、日本洋学に本来の技術的性格」であるとし、日本におけるプロテスタント受容の根底に横たわる問題を指摘されている。

### 第二章「日本基督公会」

日本基督公会に対する著者の評価は従前から一貫して変わらない。「明治のキリスト教」（『近代日本思想史』第二巻 一九五六年 青木書店）と比較して、今回は「公会」の用語をめぐり、聖公会が意識されているのではないか、という指摘が目についた。興味深く蓋然性は高いが、今のところ推測の域を出ないように思われる。「日本基督公会は、つきつめて行くなら、『外国』と『宣教師』と『教派』にはかかわらぬ教会ということになるであろう」（四七頁）が、この章の結論。

### 第三章「教会合同問題」

一八七三年の高札撤去により、教派主義への傾向が強まり「公会主義」は破綻する。一致教会と組合教会の合同案も不調に終わり、一致教会は簡易信条の日本基督教会となる。「日本の基督教は当初より已に日本の精神を以て充され」ていたとする植村正久は、一致教会の教派信条主義からの脱却を、「独立寛宏なる日本

精神」にかなったものとして歓迎した。著者はこれを「安易、性急な日本的自負」と呼び、戦前日本のプロテスタント教会の一つの大きな特色と見ている（六四頁）。ともかくも日本基督教会の成立は、教派と無教派、外国と日本をめぐる攻防のぎりぎりの決着であり、教会合同問題は、この時点でより以上の展開を望み得ない終局に到達したというのは冷厳な事実認識である。

#### 第四章「海外伝道」

著者は「朝鮮民族の精神的征服」をめざす組合教会の朝鮮伝道に、「外国宣教師と関係なきキリスト教」がどん底まで墮落して日本国家の御用宗教となり果てた姿を検証する。歴史記述そのものは松尾尊允氏に負うところが大きい、重大なのは朝鮮伝道を支えた神学の理解である。著者は、渡瀬常吉の『日本神学の提唱』において顕著な比定（アレゴリ）的思考が、植村にも歴然としてあるとし、「これは、日本プロテスタント教会の先天的日本主義の実体であるかもしれない」と推量する。「比定」は横井小楠の実学とプロテスタンティズムの間にも働き、熊本バンドの「国家に奉仕するキリスト教」を生み出し、組合教会の朝鮮伝道に行き着く。そして、この道の行き着くところとしての日本基督教団は、最大規模において、「公会主義」を実現したものとされるのである。

ちなみに、『上毛教界月報』は安中教会の機関誌（七四頁）ではない。柏木義円の個人誌的色彩が強いが、上毛教界月報社発行。しいていえば両毛地区組合教会の機関誌的役割を果たした。柏木が組合教会の朝鮮伝道に反対する思想的背景の理解とその評価が気になるところであった。

## 基督教未成品観と堅固ならざる聖書観（五章）

「戦前日本プロテスタント思想の主流をなしていたのは基督教未成品観である。これにはいたって堅固ならざる聖書観が随伴していた。戦前の日本プロテスタント教会が、国家権力に対し、全体としては常に協力追従の姿勢をとったのも、背後にこのような思想が控えていたからであり、日本基督教会の成立、組合教会の朝鮮伝道、日本基督教団の結成、みな基督教未成品観のなせるわざにほかならない」（二二八頁）

ここに本書の主張は集約されている。「未成品」は植村正久の言葉である。植村は欧米の教派を既成品とは見ず、むしろ日本におけるキリスト教の「進歩展開は無尽蔵」と確信する「公会主義」者であった。一方、トムソンによれば初代宣教師たちが「公会主義」を支持したのは、「日本の教会が一旦簡易明白に陳述せられたる大綱領の上に建設せらるゝときは、必ず他の諸国に於ける歴史的教会のなせる如く、自ら進んで聖書の中より十分なる又満足す可き信条を開発し、随意之を採用するに至る可しと確信」したからだという（一二九頁）。この「公会主義」をめぐる宣教師と日本人信徒の理解の相違も、著者がかねてから注目するところである（明治のキリスト教）。

結果としてトムソンの確信ははずれた。簡易信条で出発した教会が内的に歴史のなかに深まることはなかった。「戦前の日本プロテスタント教会の主流が歴史的教会を目指したことがあったか。歴史的教会にかえて日本の教会を目指したのではなかったか」（二三〇頁）という著者の指摘は、するどく射ている。また、この主流にあきたらず、異なる道を歩んだ教会が日本聖公会であることも間違いない。確かに日本基督教団に加わらなかった聖公会の教会性は特筆に値する。しかし、英国国教会の国家との親密観、国民教会としての自覚は、そのまま日本に持ち込まれ、天皇制国家に重ねられたということも覚えられるべきであろう。そ

の意味で言えば聖公会という歴史的教会もまた日本に埋没したと言えるのではないだろうか。

主流の「堅固ならざる聖書観」については、内村鑑三が別の道を示したとする。著者はまず植村について言う。「基督教未成品観のおもむくところ、龐大な規模をもつ総合の体系が姿をあらわす」（一一五頁）。「これは、キリスト教思想の形態としては、十三世紀西欧に典型を見いだすスコラ的カトリック世界観と同一である」（一二六頁）。「諸宗教諸哲学思想のキリスト教的綜合を意図するなら、植村が比定的アレゴリ的思考に馴じむのは当然であろう」（一二七頁）。

これに対し、内村の場合はプロテスタントの方法的立場が明確であると絶賛される。『近代』なる者はルーテルの聖書研究を以て始まった」と言う内村に、著者は「植村の、独立寛宏、どこまで広がるかわからぬ綜合の体系とは全く異なったもの」を見いだすのである。内村の聖書観は「一言一句誤謬なき神の言」であるのに対し、植村のそれは主観主義であり、この違いが内村をして「プロテスタント主義キリスト教の歴史的掘り下げ」に向かわせたとされる。とすれば、この観点からの内村評価、および植村批判は、内村と同様に、素朴な聖書主義に立つ福音派諸教会に多くの示唆を与えていると思う。但し、聖書のみに立脚した内村の強さは、また同時に歴史的教会形成における弱さでもあると私は考える。

本書では触れられていないが、福音派の歴史記述は、戦前に純福音派といわれた諸教会の歴史を、主流を中心とした教会史にどう位置付けるかという課題を今後に残している。その場合にも、本書において示された「日本プロテスタント史」理解の筋道は、心強い道標であり続けるに違いない。

（歴史神学・講師）